

令和 4 年 6 月 20 日現在

機関番号：32518

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02552

研究課題名(和文) グレゴリ夫人と文芸サロン 情報・教育・活動の領域

研究課題名(英文) LadyGregory and the Literary Salons

研究代表者

海老澤 邦江 (Ebisawa, Kunie)

江戸川大学・メディアコミュニケーション学部・教授

研究者番号：90413046

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：英国18世紀の文芸サロンにおける文化的交流や活動が、啓蒙主義の時代思潮と相俟って、文化芸術の発展と女性の社会的活動領域の拡大に大きく寄与したことを示した。その延長線上の活動として、19世紀後半のアイルランドの文芸復興運動の隆盛が表れると考える。これらの活動の象徴的な人物として主に以下の作家を研究対象とした。英国18世紀では、アン・フィンチ、メアリ・モンタギュー夫人を、19世紀アイルランドでは、独立運動ならびに文芸復興運動に社会的な影響を与え続けたグレゴリ夫人を中心に、教育・交流・文化創出の「場」を提供した「文芸サロン」の役割を示した。特に彼女の戯曲に描かれた女性像解釈の斬新さを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

19世紀末から20世紀初頭のアイルランドにおける文芸復興運動に関わるグレゴリ夫人の貢献はすでに一般的に認められている。夫人を中心としたイエイツやシングたちの研究蓄積は豊富にあり、さらにそれに関する研究は、現在でも広く推進されている。しかしながら、その活動の発端をサロン活動に求め、グレゴリ夫人を核とした文芸サロンが社会的な文化活動の視点から考察を試みる点に本研究の意義があると思われる。さらに、19世紀ビクトリア朝の倫理観を鑑みると、アイルランドにおける女性の社会的活動を文学、特に演劇領域に絞り、英国との比較を試みながら、女性の活躍とその業績、また新しい表現の斬新さを明らかにしようとする。

研究成果の概要(英文)：At the beginning of the 20th century, a long-term accumulated academic research has showed the most flourishing time in the theatrical activities, well-known as the Irish Renaissance. Lady Gregory's energetic devotion, with W. B. Yeats J. M. Synge, led the movement into a fruitful embodiment of their ideal national literature, and produced their major literary works. The purpose of this study is both to examine how Lady Gregory's gathering works and develops into the core of the movement in terms of a cultural point of view and to compare the cultural activities with the 18th century British salons and Lady Gregory's gatherings. Generally aristocratic social activities in the salons are considered as the communicative sphere of high society. They have, however, strong social influence on modern cultural development. Women, in particular, begin to emerge in the social, political and cultural world, presenting their own voices and ideas. This study attempts to depict their new voice.

研究分野：英語文学

キーワード：英国文芸サロン アイルランド文芸復興運動 グレゴリ夫人とW.B.イエイツ 女性とサロン文化

## 1. 研究開始当初の背景

現代アイルランド文学を考察する際には、19世紀末から20世紀初頭に文学史ならびに文化史に記録される文芸復興運動は必須の研究対象である。文学領域において、オーガスタ・グレゴリ夫人を中心としたW.B. イェイツ、J. M. シングらの戯曲ならびに国民劇場の建設、それを基点とした国民文学構築があった。20世紀に入ってから、ジョイス、ベケットなどアイルランド文学を代表する作家や作品が誕生し、アイルランド文学は、日本文学にも大きな影響を与えている。日本の英文学研究において、アイルランド文学研究を志す学徒は増加しながらも、個々の作家や作品研究が中心であった。英語圏文学研究において、伝統的な英米文学研究が主流であり、その周辺国の文学に目が向けられるのは、多くの場合、個別の文化史的、比較文学的興味関心に留まり、ヨーロッパ近現代の文学俯瞰図の枠組みで語られることは少なかった。

21世紀になると、シェイマス・ヒーニーら、現代アイルランドの文学者、作家・詩人が注目を浴びる。また、アイルランドの文化紹介、イェイツの戯曲が日本の能や狂言などに翻案され上演されるなど、研究や芸術活動を通じて文化や芸術表現における交流が促進され、新しい視点から19世紀アイルランド文学の再考を試みる機会や研究者が増加した。その流れの中で、グレゴリ夫人の業績や作品を現代的視点から再検討することで、新たな作品や業績評価が可能となり、ほぼ評価が定まりつつあるイェイツやシングの作品にも新たな光を当てることになる。

## 2. 研究の目的

グレゴリ夫人を中心とする文学活動を、18世紀英国で大きな文化的な社会活動となり、英国文学界に重要な足跡を残した文芸サロンの伝統の延長線上に考察する。これまでグレゴリ夫人個人、イェイツやシングら一部の文人グループの、独立した文芸活動という観点から、アイルランド文芸復興運動は検討されてきた。しかし、グレゴリ夫人を中心とした文人の集まりは、アイルランドの「独立」を政治的意味だけでなく、「精神的」独立を目指し、さらに高度な精神性と文化性を明示するために「国民的な文学」の誕生を戯曲に見出そうとした。その理念と活動は、グレゴリ夫人個人の恣意的な動機から発したわけではなく、18世紀英国の伝統的な文芸サロンの活動にその原型を見ることができるのではないだろうか。本研究は、政治的愛国的な視点から議論されることが多いグレゴリ夫人を中心とした文芸復興運動が、次世代の文学や文人を誕生させる「場」となったことを明らかにする。それとともに、ビクトリア朝時代の倫理観を脱し、女性の社会的役割や表現力を発揮する「場」となったことも明らかにする。

(1) 英国18世紀の文学事情を文化ならびに社会情勢の変化の中でとらえ、特に女性が活躍したサロンに注目し、その文学・文化上の影響関係の見取り図を描く。まず、名誉革命以降、宮廷周辺ならびに市民社会の変化が、新しい言語表現、手段を誕生させることになった。男性の書き手を中心とした文学界とジャーナリズムの一方では、上流階級の女性が中心

となって文学活動を行うサロンが多数形成された。初期においては、男性と女性の明確な区別があったわけではなく、女性の書き手が男性主宰のサロンの中から頭角を現す場合が多かった。その象徴的な人物が、ウィンチルシー伯爵夫人アン・フィンチである。まず、フィンチの作品が認められた文学思潮と環境、ならびに女性の書き手として「書く」権利の主張と言語表現に関わる主張を考察する。

(2)18世紀中庸までには、多くの女性の書き手が誕生する。それとともに、サロンも増し、誰がどのサロンの常連客なのか、作品の評判などによってサロンの格付けがなされるようになる。サロンの性質や格は、そこに所属する書き手の社会的地位や将来の人間関係の拡張などを大きく左右するからである。こうしたサロンの中でも、メアリ・モンタギュー夫人のサロンは、社会的に影響力が大きい著名なサロンであった。夫人のサロンは、元来はフランスのサロンに倣って、18世紀の啓蒙主義を標榜する知的な人々の集まりであった。サロンを「上流階級だけに開放された閉じられた場」ではなく、リベラルでグローバルな雰囲気を感じた、「開かれた、対話・交流の場」と見なした。モンタギュー夫人の著作(エッセイ・手紙、戯曲など)から18世紀中期に英国社会で注目された「開かれた場」としての文芸サロンの実情とともに、女性が獲得した「表現の自由」の実現の場を明らかにする。

(3)19世紀後半、インド総督府の高官であった夫ウィリアムの死後、独立運動の気運に促されるかのように、グレゴリ夫人独自の社会活動が始まる。活動の初期から、国民文学の創生を目指すというのではなく、逆に地方的な立ち位置から文学活動を始めた。もともと文学の深い造詣のある夫人であったが、グレゴリ家の土地スライゴで日常的に使用されている言語(ゲール語)の危機的状況が、夫人を活動に向かわせたと言ってよいだろう。その地方で話されるキルタータン英語を用いて文学表現の個性を発揮する作品を発表する。またそれ以前から、そこに暮らす庶民が保持する口承説話や伝説にも親しみを持っていた。英国からの独立を目指したダグラス・ハイドとの交流が、消滅の危機にあったゲール語の再評価を後押ししたとも言える。独立運動に関わる人間関係から、イエイツと出会うことになる。その出会いから、アイルランド文学の創生と確率が理念となり、生涯の目的となる。政治的、地勢的独立だけでなく、精神的文化的独立を目的に、グレゴリ夫人は文学活動に力を注ぐことになる。劇場建設は、母語(ゲール語)を消滅の危機から救う、またアイルランドの文化を形象化し実現する意味もあった。劇場建設の具体的な内容(土地・建物・運営など)については、グレゴリ夫人、劇場のコンテンツ(戯曲、演者など)についてはイエイツという役割分担で考えられる場合が多いので、実作者グレゴリ夫人が注目されることはこれまでそれほど多くない。しかし、実際には、庶民を楽しませた作品の多くは、グレゴリ夫人の手による。また、戯曲の性質やアイルランド固有の物語を重視した方針から、女主人公が登場する。同じ登場人物がイエイツやシングらと競作することがあったが、女性の視点から描かれたグレゴリ夫人のヒロインは、従来の解釈とは異なり異彩を放ち特に注目に値する。現代の視点から新たな女性像をグレゴリ夫人独自の表現ととらえ、その具体的な手法や考え方を明らかにする。

### 3. 研究方法

基本的には、18世紀から20世紀に渡る、英国とアイルランドの文化史的研究文献や個々の作家や詩人、文人の作品、ならびにそれらを専門に研究する内外の研究者による専門文献の読解、ならびに学会・研究会における情報交換が主な研究方法と手段となる。

17世紀末の名誉革命以降の英国事情、18世紀関係 = アン・フィンチ、メアリ・モンタギュー夫人の評伝ならびに作品集、英国貴族を中心とした英国社会に関する文献を使用して、サロン文化の誕生の社会を概観する。また、18世紀文芸サロンが大陸経由であり、多分に当時の啓蒙主義の理念を反映していたことと、女性の社会的地位と文字リテラシーの関係を踏まえた上で、著述する行為と女性の活動の拡大を調べた。

19世紀アイルランド（英国植民地時代）における、貴族階級に属するグレゴリ夫人の教育環境ならびに一般庶民との関係を主に評伝や自伝等の読解から確認する。英国植民地下のアイルランドの文化、特に言語文化の実態を調べた。さらに、20世紀初頭に継承される、アイルランド独立運動の経緯を社会的側面と文化的側面から検討する。

グレゴリ夫人、イェイツ、シングラ文芸復興運動を牽引した作家たちの作品研究。そのテーマのひとつとして、戯曲に表現された女主人公の描き方を比較検討し、その差異を明確にグレゴリ夫人の表現手法の特質を明らかにした。

### 4. 研究成果

(1) 英国 18世紀の文芸サロン世界における女性の活動状況の深い理解を獲得できた。それとともに、英国サロンが大陸、特にフランスのサロン社会から大きな影響を得て、相互の人的、知的交流によりサロンの集いに活動領域と人脈の拡大が生まれた。詩歌のみならず、ジャーナリズムや国際社会への、女性たち積極的な関わりや発言が促された社会的背景や思潮を理解し、現代社会における女性の社会進出の礎となっていることが明らかになった。

(2) 英国の代表的な 18世紀サロンと女性作家、文人の作品の精読研究から、当時の女性たちが、例えば当時の社会が抱えていた性差に関わる社会問題を理性的にとらえ、その解消とあるべき社会のあり方を柔軟で、リベラルな思考力を発揮して、その理想を創作やエッセイ、日記などの文書から理解できた。こうした女性たちの活動は、一般的に信じられていた保守的で伝統や因習に捕らわれた抑圧された女性像とは異なり、むしろ現代に近い共感を呼び生き活きと活動する女性の姿を明らかにした。

(3) アイルランドは、19世紀初頭に英国による併合以来、イギリスの植民地として、力を誇示する雄のブルドックに組み敷かれる、弱弱しい女神キャスリーンという文化的表象によって表わされてきた。文学においてマライア・エッジワース(Maria Edgeworth, 1768 – 1849)を除いては、あたかも文学的空白時期を象徴するかのよう18、19世紀には英国に匹敵する女性の活躍は稀である。だが、グレゴリ夫人の登場によって、一挙にアイルランドの女性たちの政治的、社会的そして文化的活躍が際立つ。英国との大きな差異は、アイルランドにおける女性たちの活躍は、英国からの独立運動に関わることが多い。英国への同化で

はなく、英国との差異を文化的遺産に求める傾向が顕著であり、言語を始めとした「アイリッシュネス」をテーマにした活動が起点にあった。そこにグレゴリ夫人を中心とした集いが発生したこと、その集いは多分にグレゴリ夫人の環境から学びえた英国サロンが下敷きにあったことなどを再確認できた。グレゴリ夫人は、その社会的影響力から彼女の政治力や人的交流、社会的活動に注目されるが、本研究においては、その行動や活動よりも、発表された作品研究に重点を置き、深い作品理解が可能となった。特に、言語的には、ゲール語の文法構造を反映したキルタータン方言で書かれた戯曲、さらにはアイルランドの神話や伝説に取材したテーマや物語の再生、特に女性主人公の描き方や捉え方に、同志のイエイツやシングの作品では見られなかった、斬新さや特質があったことを発見し明らかにできた。

### 主な発表論文等

〔雑誌論文〕

1. 著者名 海老澤 邦江
2. 論文標題 **18世紀英国「サロン」文化の芽生えーウィンチルシー伯爵夫人アン・フィンチを起点にしてー** (単著)

3. 雑誌名 江戸川大学紀要 第30号  
(2020年3月) 431-440

**18世紀英国における文芸サロンの実情を調査。その環境の中で女性詩人・作家の誕生とその主張を明らかにした。**

1. 著者名 海老澤 邦江
2. 論文標題 「サロン」文化と女性詩人の誕生 (単著)

3. 雑誌名 江戸川大学紀要 第30号  
(発行年 2020年3月) 537-540

**18世紀英国におけるジェンダ問題。女性作家への偏見ならびに文字リテラシー、社会活動の障壁を踏まえ、サロンが社会的障壁を超克する「場」となったことを示した。**

1. 著者名 海老澤 邦江
2. 論文標題 「生」か「死」か、グレゴリ夫人の『グローニア』の選択 (単著)
3. 雑誌名 江戸川大学紀要 第32号

(発行年 2022年3月) 237-248

掲載論文の DOI 10.50831/00001051

他の戯曲家による作品比較を行い、アイルランド神話に取材した戯曲のヒロイン「グローニア」解釈の現代的な斬新さを考察。

〔図書〕 計1件

1. 著者名 海老澤邦江
2. 出版社 音羽書房鶴見書店
3. 雑誌名 『緑の信管と緑の庭園』

(岩永、諏訪。谷本編)

論文標題 モンタギュ夫人の倒立した喜劇『天真爛漫』(単著)

(2021年3月) 135-148

ISBN978-4-7553-0423-1 C3098

モンタギュ夫人の翻案戯曲の研究。フランスの原作戯曲と比較し、表現の差異から当時の結婚制度とジェンダ課題を考察。

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集 **The International Yeats Society and the Yeats Society of Japan Joint Symposium in Kyoto 2018 / the 54th Annual Conference of the Yeats Society of Japan** (2018 国際イエイツ協会・日本イエイツ協会合同共催大会/第54回日本イエイツ協会年次大会) 参加

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 海老澤 邦江	4. 巻 第30号
2. 論文標題 18世紀英国「サロン」文化の芽生え ウィンチルシー伯爵夫人アン・フィンチを起点にしてー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 江戸川大学紀要	6. 最初と最後の頁 431-440
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 海老澤 邦江	4. 巻 第30号
2. 論文標題 「サロン」文化と女性詩人の誕生	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 江戸川大学紀要	6. 最初と最後の頁 537-540
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 海老澤 邦江	4. 巻 32号
2. 論文標題 「生」か「死」か、グレゴリ夫人の『グローニア』の選択	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 江戸川大学紀要	6. 最初と最後の頁 237-248
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.50831/00001051	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 海老澤邦江	4. 発行年 2021年
2. 出版社 音羽書房鶴見書店	5. 総ページ数 431
3. 書名 「モンタギュ夫人の倒立した喜劇『天真爛漫』」135頁～148頁（『緑の信管と緑の庭園』）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

江戸川大学学術リポジトリ  
<https://edo.repo.nii.ac.jp/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 国際イェイツ協会シンポジウム	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 The International Yeats Society and the Yeats Society of Japan Joint Symposium in Kyoto 2018 / the 54th Annual Conference of the Yeats Society of Japan	開催年 2018年～2018年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------